

本物時代到来…共にあり、共に生きる「共生」

皆様、明けましておめでとう御座います。昨年はまさに激動の1年でした。そして、恐らく今年も、激動の1年になるだろうと想像しています。強いて言えば、数年前から言われている「本物時代」に本格的に突入していくだろうと言えます。

「本物思考」や「本物人間」等と、世間では少し言い古された言葉に響きますが、時代は「本物」を本当に求めているんだなあと、私自身実感しているところです。この「本物」という事については、また後ほどお話しさせて頂きたいと思えます…。

さあ、平成20年というのは『十二支』の上では、一番最初の「子（ネズミ）」年です。この十二支というのは「子ネ・丑ウシ・寅トラ・卯ウ・辰タツ・巳ミ・午ウマ・未ヒツジ・申サル・酉トリ・戌イヌ・亥イ」と、動物に譬えられています。それは別に植物の一生にも譬えられている事はあまり知られていないのではないのでしょうか？その植物で譬えれば、昨年の「亥」年は落ち葉が土に返る年でありました。そして今年の

「子」という年は、「種子」の「子」であります。種子と言えば、植物では一番最初、スタートであります。その種子に肥料や太陽の熱や風雨といった、自然の「栄養」が注がれる事でグングン成長していきます。しかし同じ種子でも、栄養の与え方で全く違った成長の仕方を見せます。そして同じように私達人間にも、それぞれの「種子」が平等に与えられていると言います。それぞれの人生の中で、その人その人にだけ与えられている目的や使命という「種子」を備えているのです。まずは、自分に与えられたその種子に気が付く事が肝心と言えるでしょう。そして気が付いたならば、その種子に調度良い栄養（努力）を与えていかねばなりません。ここでは、その栄養の与えが大事になりますね。何事も偏つてはいけません。しかし私達は、どうしても偏つてしまします。調度良いところで栄養を与えることができるなら、誰も苦労なんてしません。でも悲しいかな、偏つてしまつたのです。では偏つてしまつた原因は何だと思えますか？それは「我欲」という天秤の上で物事を計算してしまつたからではないのでしょうか？我欲という天秤の上で計算している…確かにそうかもしれません。自分

自身振り返ってみると気が付けそうです。そう思いませんか？そうは言っても、頭で理解できても、私達は誰一人として「我欲」を脱すことは不可能な存在なのです。ではどうしたら良いのでしょうか？それは「我欲」の根源を知ることが必要なのです。元々「我欲」とは、自分にとって都合の良い事を追い求める事から始まります。しかしそんなものを追い求めたつて、結局は元通り。良いも悪いも、何事も表裏一体ですから、都合の良いことを追い求めれば、同時に都合の悪いことも降りかかる事を実感できるでしょう。何故ならこの世の中、自分に都合の良いことばかりが起るはずはありませんから…。都合の悪いことも同じように降りかかるのが世の常です。例えば「光」という自分にとって都合の良い好機（プラス作用）があつたとします。するとその対角には「影」という嫌機（マイナス作用）も、くっ付いています。私達は太陽に照らされると、足元に影が落ちるでしょう。考えてみると、人生も同じであります。光がある所に影ができるように、頭をうなだれて足元しか見えない状況に追い込まれた時でも、足元には必ず影を確認することができるはず。私達は生きている限

り、『命という光』に照らし出されている事を忘れてはいけません。自分の周囲を見渡してみても、それは他人でも良い、動植物でも良い、とにかく自分以外の生命が必ず息吹いている筈です。この世の中、自分一人だけでないことを実感できる筈です。必ず、どこかで自分を照らし出す光の存在があるはず。だって私達は誰一人として、一人では生命を生かす事なんて出来ない弱い存在なのです。また、私達はその生命の弱さを知っているからこそ、助け合い、協力し合うのでしよう。そして周囲の光となる存在に支えられて、力強く、生き活きと、この生命を生かす事ができるのでしよう。誰しもが備えている、自分の中にある「種子」に、光という栄養を注ぎ込むことによつて、この生命が輝きだし、生かされていくのです。周囲にあるその光に気が付くことが「本物」へと向かう、大きな第一歩になる事と思えます。

まだまだ皆様の記憶に新しいと思うのですが、先月12月22日『冬至の水行』は清々しい気持ちになられた方も多かったのではないかと、1人微笑しています。水行に参加さ

れた方々は皆さん声を揃えて仰いました。「清々しい気持ちになりました。周囲の太鼓の音や、お題目の音が耳に入り、一生懸命に水を被ることができました。これで来たるべき年も康らかに迎えられそうです。来年の水行も参加させて頂きます」と…。また、周囲でお題目を唱えながら、太鼓を叩いて下さっていた檀家・信徒の皆様は「生きる勇氣と、元気が出ました。本当に涙が出るくらい感動しました。ありがとうございます」と、仰っていました。水を被る方と、その姿を周囲で応援する方と、双方互いに、自分が備えている「種子」に光を注ぎ合う事ができたからこそ、上述の感想になったものと思っています。皆様の反応に、私自身感謝申し上げているところであります。本当に有り難いことです。まさに私の生きるテーマでもある『共生』が、そこに実感することができました。

私が目指している人生のテーマは『共生（ともいき）』です。言い換えれば、「共に在る」ということです。「共にある」というのは、私達生きとし生けるもの達の代名詞でもありません。これを忘れて自分という存在はあり得ないからです。この代名詞に光を当てつつ、常に問い続ける人間でありたい、僧侶でありたいと思います。そして「呼吸し続けるお寺」であり続けたいと思っています。「呼吸」というのは、自然に、当たり前にする行為であり、かつ必要不可欠であると言えます。お寺が、地域の単なる風景の1つでは意味がないと思っています。お寺は、地域で意味のある、本当に大切な風景にならねばならないと考えています。「本物」の風景です（笑）。

これまで私は僧侶として檀家・信徒の皆様の方に照らされて支えられてきました。それはこれからも何ら変わることはないと思っています。であるならば、私も皆様の添え木として、何かに役立つことができれば幸いと思っています。私達は一人ではありません。みんなで1つの命なのです。グローバルに地球を眺めると、私達1人1人は、この平成という時代を生かさせて頂いている大きな生命体の中の、1細胞なのでしょう。近くは、夫婦や親子としての1細胞。大きく眺めれば、富山県人としての1細胞。日本人としての1細胞。そして世界の人類としての1細胞という存在なのです。そう考えると自分というのは、自分が備えている「種子」に周囲の生命体から光を注いでもらっただけの単なる存在ではなく、自分自身も誰かの、何かの生命体へと光を注ぎ、輝かせる事ができる、無くてはならない大事な光の存在である事を知らねばなりません。自分の生命は、自分だけのものではありません。先祖から代々脈々と受け継がれ、いま命のバトンを受けられた、大切な1つの生命なのです。命と命が共に支え合い、自分の種子に栄養を注ぎ、輝かせる事が、私達にとって何よりの生き甲斐になるのではないのでしょうか？

今年も1年間『健康』に過ごしたいものです。最後になりますが、『健康』には2つの大切な漢字が隠れていることを紹介して新年の挨拶に代えさせて頂きます。「健康」には本来、「体」と「心」という二字が付いています。「健体康心（けんたいこうしん）」と言います。「体（健）すこやかに、心（康）やすらかに」であります。私達の一生の中で「体」は年を重ねる毎にシワが増え、足腰が痛くなり、病気にもかかりやすくなります。つまり体は死に向かって、どんどん衰えていきまします。しかし体の中で衰えを知らない部分、それが「心」であります。「心」は、衰えるどころか、年を重ねるにつれ、その年輪が心に深く刻まれ、死を迎える瞬間まで成長し続けるものです。『健体康心』とは目に見える「体」は勿論大事だけど、それよりも大事な目に見えない「心」の成長に力を入れることを教えてくれます。本当の健康とは、体の自由、不自由を問題にするのではなく、心の康らぎに視点を置くのです。心があつて始めて私達は行動します。「体」を動かす原動力になる「心」を磨くのです。心康らかなれば、体健やかなりです。その「心」を磨く為の場所としてのお寺を目指したいと思えます。皆様のお陰の支えに感謝し、今年も怠ることなく精進させて頂きたいと思えます。

今年1からスタートの年です。

心を康らかに充実させ、体をイキイキと健やかに、お題目を唱え、今を生かされている事を実感し感謝しながら、今年も共に頑張りましょう。

合掌 副住職 谷川寛敬

